

# キョウチクトウ

牧 幸 男

梅雨が明け、真夏の太陽が照りつける頃、キョウチクトウの季節となる。炎天下、太陽に向かい負けじと咲くこの花の強さに、私は引きつけられる。キョウチクトウのイメージは人それぞれである。大仏次郎は『炎暑の花』の中で「最初夾竹桃を見たのは、横浜の異人町だったせいか、私はいつまでもこの花が異国的に見える。昔の洋館の濃く青ペンキを塗った板扉と、この赤い花とは、よく調和して見えた。」と記述しているが、異国風なイメージがする花である。

私がこのキョウチクトウに関心を持つようになったのは、この植物が公害に強いと学んだ時からである。キョウチクトウは、インド原産、キョウチクトウ科の常緑低木、鑑賞用に庭に植えることが多いが、街路樹や公園の緑化樹としても人気が高い。幹の高さは3m程度成長することがあり、葉は厚い線状皮針形、全縁で毛がない。夏、枝の先に花穂をなし、ほのかに香る美しい花を開く。花は一重、八重咲があり、色は紅色が主であるが、帯黄色や白色もあり、葉も白い斑入りや白色覆輪等がある。乾燥や暑さに耐え、条件が悪い所でも良く生育する。

昭和40年代、わが国の公害問題が未熟であった頃、この木の葉が大気に含まれている硫酸イオンを多く吸収するという研究機関の発表があったため、公害に強い樹木として植樹されることが多かった。当時の公害患者はこの木を見ると、喘息発作が始まるからと不評であり、一時公害都市のシンボルかのように言われたことがあった。環境への適応力が強いというだけで、キョウチクトウにとっては迷惑至極の時代である。現在は、大気中の硫酸イオンは全く問題がなくなり、真夏のシンボルのような木になったのは、嬉しいことである。また、広島市では原投下後75年間草木も生えないと言われたが、被爆焼土にいち早く咲いた花として知られている。この結果、原爆からの復興のシンボルとなり広島市の花に指定された経緯がある。私は、9月スペインを旅した時、大木のキョウチクトウを良く目にした。

原産地がインドであるよう、南国育ちの植物だけに、長野県内では寒さに弱く、越冬させるには冬期間室内に置き保温対策をしないと翌年まで楽しむことができない。しかし、近年県内でもキョウチクトウを育てている人も多く、夏には私達を楽しませてくれる。こんな姿を見ると地球の温暖化が進んでいると感じざるを得ない。

我が国への渡来時期ははっきりしないが、中国を経て江戸時代中期の享保年間(1716～1736)、あるいは寛政年間(1789～1801)ではないかと言われている。寺島良安(1653～没年?)の『和漢三才図会』(1713)や青木昆陽(1698～1769)著『昆陽漫録』(1777～1769)にこの植物の記録があり、小野蘭山(1729～1810)の『花彙』(1763)には「本土ニ産セス。今南方ヨリ移シ来タリテ甚タ盛ナリ。」と記載し「半年紅」の和名が付されている。花は、熱帯地域ではほとんど一年中咲いているが、日本では夏期の6～9月頃に開花する。花卉は基部が筒状、その先端で平らに開いて五弁に分かれ、それぞれがややプロペラ状に曲がる。花色は淡紅色が普通だが、紅色、黄色、白等多数の園芸品種があり、八重咲きや大輪咲きの種もある。我が国の場合、花粉媒介者がいなかったり、挿し木で繁殖したクローンが多いので、受粉し果実が実ることはあまりなく、ごくまれに果実が実ることがある。果実は細長い袋状で、熟すると縦に割れ、中からは長い褐色の綿毛を持った種子が出る。



紅色の夾竹桃と白色の夾竹桃（撮影：松本市内）

これまで、この植物は強心配糖体のネリオドリンやネリオドレインを含んでいるので、有毒植物として知られてきた。古くは『仏教典籍』（からびらじゆ 仏教聖典の総称）に歌羅毘羅樹の名で登場し、悪人にこの花輪を被せたとあり、地域によっては自殺や、墮胎、矢毒に塗ったりした。また、ギリシア、イタリアでは葬式の花、中国では寺院に植え邪気を払う植物にしている。更に、花、葉、枝、根、果実すべての部分と、周辺の土壌にも毒性があるだけでなく、生木を燃やした煙も有毒である。更に、腐葉土にしても1年間は毒性が残るため、腐葉土にする際にも注意しなくてはならない。中毒症状は、嘔気・嘔吐、四肢脱力、倦怠感、下痢、非回転性めまい、腹痛等である。治療法はジギタリス中毒と同様である。毒性の強さは、夾竹桃に含まれる「オレアンドリン」の致死量は0.3mg/kg、フグ毒の「テトロドトキシン」は0.01mg/kg、青酸カリは150~300mg/kg等を参考にしてほしい。

このように毒性が知られていたので、渡来当初は庭木に植えることを嫌ったり、詩歌に取り上げたりすることも少なかった。明治以降、花の美しさから詩歌に詠まれるようになった。

たがために 一枝折りし はればれと 庭にも内にも 夾竹桃の花 釈 迢空

夾竹桃 ピカドンの日を さりげなく 平 晴 塔

植物名のキョウチクトウは、漢名の「夾竹桃」を音読みにしたのが語原で、漢名は葉がタケのように細く似ていること、花がモモに似ていると中国人が思ったことが由来である。各国により名前の由来は異なり「バラのような花の咲く月桂樹」(Laurier-rose)、「馬殺し」(インド)と呼ぶ国もある。別名は桃葉紅、きょうしゅつとう 叫出冬、くなえい 半年紅、枸那、枸那衛などがある。いずれも、植物の開花からの命名であるが、由来が不明のものもある。学名は *Nerium indicum*、属名はギリシア語の *nerose* (湿った) に由来し湿地に良く育つ意味であるが、関係ないようだ。種小名はインドに産するである。

薬用は、葉を強心剤や利尿剤や麻酔にも使われていた。しかし、非常に毒性が強いため、素人の使用は厳禁である。その他、打撲のときは、痛み、葉、樹皮の乾燥したものを煎じて、患部を洗うこともある。使用にあたって、この植物には植物全体が有毒であることを承知し、口に入れたり、枝を折ったときの乳汁を洗い流す等を忘れないことである。

花言葉は「注意」「危険」「油断禁物」である。

参考に我が国の中毒例等を示す。

- ① 日本では、1877年(明治10年)の西南戦争のときに、官軍の兵が折った枝を箸代わりに利用し、中毒した。
- ② 1980年に、千葉県農産で牛に与える飼料の中に夾竹桃の葉が混入する事故があり、この飼料を食べた乳牛20頭が中毒をおこし、そのうちの9頭が死亡した。混入した量は、牛1頭あたり、乾いた夾竹桃の葉約0.5g程度だったという。
- ③ 福岡市では、2009年12月「毒性が強い」として市立学校に栽植されているキョウチクトウを伐採する方針を打ち出した、間もなく撤回している。
- ④ 2017年、香川県高松市内の小学校の校庭に植えられたキョウチクトウの葉を3枚から5枚食べた2年生の児童2人が、吐き気や頭痛などの中毒症状を起こし、一時入院した。

